

令和2年度東亜大学自己点検・評価報告書に関する外部評価

東亜大学は医療学部医療工学科、医療学部健康栄養学科、人間科学部心理・臨床子ども学科、人間科学部国際交流学科、人間科学部スポーツ健康学科、芸術学部アート・デザイン学科、芸術学部トータルビューティ学科という3学部7学科で構成されている。また大学院総合学術研究科を併設し、通学制・通信制でも多くの学生が学んでいる。

建学の理念を「国際的な場で学際的な研究・教育を実施し、他人のために汗を流し、ひとつの技術を身につけた人材の育成を目的とする総合大学を目指す」としている。

東亜大学学則には目的として「教育基本法に則り学校教育法の定めるところに従って、未来社会の要請に応え得る教育の環境を常に大学内に求め、人間教育並びに高度の専門職業技術教育とその研究とを実施し、もって福祉国家の創造に積極的に参加し、更に世界観に立脚して多民族の繁栄にも寄与し得る、独創的な頭脳・奉仕の精神・健全な身体を兼ね備えた人材の養成をすることを目的とする」を挙げている。さらに長期ビジョン、中期目標、中期計画を掲げ、全学的な取り組みを行っている。

今回の外部評価では上記の建学の理念、目的及び中長期の目標・計画に基づき、令和2年度の東亜大学自己点検・評価報告書について外部評価するものである。

< I. 学部 >

東亜大学の3学部7学科（医療学部<医療工学科、健康栄養学科>、人間科学部<心理臨床・子ども学科、国際交流学科、スポーツ健康学科>、芸術学部<アート・デザイン学科、トータルビューティ学科>）は、ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシーの3つのポリシーに基づき、カリキュラムの工夫により学習効果の高い授業の実現や求められる学生像・人材育成について、令和2年度もそれぞれの学科の特色を活かした形で積極的に取り組んでいる。

令和2年度は新型コロナウイルス感染拡大の影響で東亜大学だけではなく全国の多くの大学で新年度スタート時から急きょ遠隔授業への移行や密を避けるために教室定員等の再検討を余儀なくされた。そのような状況の中で東亜大学は大人数の授業を遠隔化し、どうしても対面でなければできない実験・実習科目については感染状況が落ち着いた時点で対策を徹底的に行い授業実施となった。準備期間が非常に短い状況で混乱もなく無事に新年度をスタートさせている。

新型コロナウイルス感染拡大の影響で教育の質について懸念されたが、大学が毎年実施している1年生、3年生、卒業生対象の学修成果アンケートでは、例年と変わらない結果となっており、学生への教育の質は担保されたといえる。コロナ禍でも学習意欲を持ち続けた学生及び教育の質を低下させなかった教職員へ敬意を表したい。

複数の学科では柱となっている国家試験対策や各種資格の取得も各学科が積極的に取り組んでおり、キャリア支援とリンクさせながら学生の満足度向上に貢献している。国家試験合格率も昨年度より上昇している資格もあるが、一部の国家資格では昨年度を下回ったものもあるため、教職員が一丸となつてのさらなる試験対策の充実が求められる。

東亜大学ではこれまでも、社会の教育需要を捉え適切な改革を行ってきた。今回の自己点検・評価報告書の記述を見ても、コロナ禍においても学生の立場に寄り添い、きめ細かに効果的な教育改革を実践してきたことが十分に理解できる。今年度以降も引き続き、優れた人材育成に努め、建学の理念に基づいた「国際的な場で学際的な研究・教育を実施し、他人のために汗を流し、ひとつの技術を身につけた人材の育成」ができる総合大学として、地域・社会に貢献できるような教育機関となっていくことが期待される。

<Ⅱ. 大学院>

大学院総合学術研究科は医療科学専攻、人間科学専攻、デザイン専攻、臨床心理学専攻を有し、通信制は法学専攻、人間科学専攻、デザイン専攻を有している。

中期目標に①大学院の教育の体系化、②人材育成、③生涯学習、④教育改革、⑤実学教育、⑥学生サポートを掲げ、シラバス公開、授業評価アンケートを実施し、教育内容の見直し、学生個々の専門性志向に応じた教育、生涯学習におけるキャリアアップのための目標設定、ポジティブ・ラーニング、高度職業人の育成に力を入れている。

通信制の法学専攻においてはコロナ禍においても入学試験の競争率が3倍強となっており、スクーリング等での論理的な文章の作成指導、修了生の修士論文は高い評価を受けているという。また修了生の卒後研修を目的として創立された「東亜大学租税法研究フォーラム」は学外にも研修を働きかけている。今後の大学院のさらなる充実・発展に期待したい。

<Ⅲ. 全学委員会・組織>

全学の中期目標は、教学においては①入学から卒業までの学習システムの体系化を推進し学力の強化を図る。②地球市民としての人材育成を行う。③生涯学習に貢献する。④教育改革を推進する。⑤実学教育を推進する。⑥学生サポートの充実を図る。の6点を掲げている。教職員に対しては「すべては学生のために」を、対外的にはGHL「グローバル」「ヒューマニティ」「ライセンス」をスローガンにしている。令和2年度は「活力ある教育機関として社会に貢献する」とし、「明るい未来への展望を持って、個々の能力を生かし合い一丸となつて進む『活力ある教育機関として』、地域や国際社会に対するミッションを掲げ教育と研究、学内外連携を通して『社会に貢献する』大学であろうと考えること」を掲げている。

全学委員会及び各組織がこの中期目標の達成に向かって、令和2年度はコロナ禍においても教職員一丸となつて努力してきたことが、自己点検・評価報告書より読み取れる。教学

においては、中期目標に基づく「グローバル人材の育成」の検討・実施している。広報においては学生募集戦略として教職員が協力して大学ブランド・イメージの向上に努めている。学生支援については学生電子カルテを全学的に実施し、申し送り事項の共有化、出欠の早期確認等により指導を行うなど、学生に寄り添った対応で退学者・休学者の減少を図っている。このような取り組みが学生の満足度を向上させ、大学全体の発展へと繋がるものと信じている。

＜東亜大学への提言＞

新型コロナウイルス感染拡大の影響で、従来にもまして日本の大学を取り巻く環境は厳しくなっている。少子化、高齢化、経済の先行きの不安、大学間の競争の激化等々、マイナス要因を挙げていけばきりがないともいえる。ただそのような状況であればこそ東亜大学が地域や社会に対して存在意義を明らかにしていかなければならない。

「生涯学習」の必要性は現代においては論を待たないだろう。ただ日本においては遅々として進んでいない。東亜大学はいち早く社会人入試制度や大学院での通信制設置し、他大学と比較しても生涯学習に積極的に取り組んできている。

ただ、急激な高齢化という環境の中で急増している高齢者や定年を迎えた方々の学びの場については全国的に見ても対応できている大学はまだまだ少ないと言える。東亜大学は総合大学として、医療系、人間科学系、芸術系、健康系、美容系等々、高齢者の興味がある分野が幅広くあり、専門の教員も充実している。

社会人に門戸を開いている東亜大学には、さらに通常の社会人枠を越えて、幅広く高齢者や定年を迎えた方々を視野に入れた生涯学習の機会を提供していただきたい。この下関及び北九州エリアではそのような生涯学習に十分に対応できている大学がほとんどないのが現状である。そのような方々の学びのニーズに応えることが地域の貢献・大学の発展に繋がるのではないかと考えられる。また、キャンパス内に経験豊かな高齢者が入ることで、在学生の刺激ともなるのではないかとと思われる。

この提言は新型コロナウイルスの影響で今後の見通しが困難な中、施設の完備や必要な人員の配置、行政との調整等、準備の時間がかかると思われるが、東亜大学がこれからも地域と社会に必要な大学であり続けるために、大学の使命としてぜひとも検討していただきたい。

令和3年10月13日

東亜大学自己点検・評価外部委員

富永 洋一